瑩山禅師と日本中世社会の関連について

曹洞宗総合研究センター専任研究員　宮地　清彦

宗教者と人間が、どのように中世社会で交わっていたかを話します。『伝光録』はお釈迦様から曹洞宗の二世である懐奘禅師までの伝記を瑩山禅師が解説されたものです。これに似たものに親鸞聖人の『教行信証・業の巻』があります。

ひとつの文献を通して伝記、伝記解説に費やしたという意味では、『伝光録』の存在意義は大きいです。さらに、瑩山禅師の場合は、懐奘禅師以降、自分の直接の師匠である義介禅師とご自身の伝記を『洞谷記』に記し、さらに福井県永光寺には五老峰という小高い丘のようなものがあり、そこに如浄—道元—懐奘—義介—瑩山に関する経典、法を伝える嗣書が埋められてあります。これらを含め、瑩山禅師はそこで曹洞宗の法の伝わり具合、法の護持の理想形を完成させたのだと思います。

しかし何ゆえ、そこまでしなければならないか。「曹洞宗ここに在り」を示す必要性もあったようですが、仏法を介した人とのつながりを世間に示す必要性があったのではないかと思います。もちろん、出家者のみならず、在家間にも通用します。

瑩山禅師がどのように人を観ていたか。ヒントに中世の末法思想があります。末法とは何か。西暦一一〇〇年から二〇〇年に、仏法が廃れる時代が来るという説があり、当時の仏教者はこれに恐怖感を持ち悩みました。八〇一年（延暦二十年）に成立したといわれている『末法灯明記』は、真言宗の最澄が関わったといわれていますが、撰述者は不明です。

この『末法灯明記』の中で、僧侶も檀越（檀家・信者）も、自らの教えを忘れ、あり方を見失う時代が来る、と説いています。出家者と在家者のつながりが離れた時代の到来を宣言した部分です。

『末法灯明記』は、後世に対し非常に影響力がありました。たとえば、親鸞聖人は『末法灯明記』の全文を『教行信証・化身土の巻』に引用しています。王法・仏法を俗法・真法と位置づけ、一般在家と出家者との距離感に対し、そのあり方を考えました。

日蓮上人の『教機時国序』があります。「教」は仏教、「機」は人間の機根、「時」は末法の時代、「国」は国土・環境、「序」は教えが広まる進展具合、次第です。この五つがバランスよく揃ったとき初めて末法の世の中がクリアできると考えています。『立正安国論』などでもこのようなスローガンを掲げて、文献の上でも、行動の上でも末法の世の中に対し、行動を起こされたのは日蓮上人だといわれています。

このような状況の中で、先達や同時代人の行動を見てきた瑩山禅師は、自分の文献でどのように答えを出されたかということです。『伝光録』の中に、第十七祖・僧伽難提尊者章と第四十二祖・梁山和尚章に、末法の世の中に対する説明が記載されています。両者に共通しているのは、「末法の世だといって嘆くことはない、一生懸命修行しなさい」と説いていることです。

特に、僧伽難提尊者章では「仏法が起こらない場所はなく、必ず日本のどこかで起こすことが可能だから修行し

なさい」と、フロンティアスピリッツというか、非常に意欲的な発言があり、日蓮上人に似た部分もありました。さらに、第三祖・商那和修尊者章では、「禅学道によって自らが悟った後、必ず人に会わねばならない。それを為さざる者は、拠り所のない、まったくもって不安定な状態にある」と説き、さらに、「末法の世の中にあっても、多くの優れた禅の指導者が現れた。我われも彼らと同じ志を持つ人間であり、これから会うであろう人びとにも、それを伝えていかねばならない。だからこそ、究理弁道するのだ」と説かれています。

一般の方は僧侶は深山幽谷で坐禅したり、修行し、人との付き合いが少ない、と見ているかもしれませんが、むしろ、「坐禅を極めたら人に会わなければいけない」と、瑩山禅師は説かれています。末法の時代であるがゆえに修行しなさいと、その修行も自己完結、自己満足に陥るのではなく、その法楽を外側へ、第三者へ勧めていくという責務の重大さを瑩山禅師は見出し、それを一生賭けてやりなさいということを、当時の大乗寺、永光寺、總持寺の修行者に説いたのです。

『洞谷記』にもそれが書かれています。『洞谷記・尽未来際置文』です。『洞谷記』は瑩山禅師が永光寺に移られてから、日記のような形のもので、『伝光録』と違い、生活の記録という面が色濃い文献です。その中で、「(前略)…是の故に、師檀和合して、親しく水魚の昵を作し、来際一如にして、骨肉の思いを致すべし。縦使、難値難遇の事有るとも、必ず和合和睦の思いを生ずべし」といわれています。

檀那という、信者や在家者を意味する言葉がここにも出ていますが、檀那に内在する力を信じ、彼らへの深い愛情が汲み取れると共に、在家者にも信心を持続することを促しています。仏教を信じる心を持ってほしい、仏教に対する尊敬の念がないと互いにやっていけない、というようなことを明言されています。一方通行的な慈悲心ではなく、互いに信じ合う気持ちを持ち続け、未来永劫まで続けていくことに重きを置かれています。「水魚の昵を作

し」とか「骨肉の思い」のように、出家者と在家者が和睦してほしいという思いがここに込められています。

さて、『洞谷記』には、ほかにも現在に通じる教えがあります。正中二年（一三二五）五月二十三日付けの「二大誓願」ですが、その前書と最初の誓願に注目すべき箇所があります。「同廿三日、…」に始まる文章で、「此の両願は私ならず」がそれです。衆生教化利益の念を、仏覚位に登りつめるまで持ち続けようとする意志の堅さをここで示しています。

「此の両願は私ならず」、つまり、あくまでも他者＝衆生を優先すること。それが菩提心を発し、それを生生世世継続し護持していかんとする、最初の誓願へとつながっていくのです。僧侶は、まず他人を優先するのが務めであり、それを未来永劫語りついで行くことが務めだと説いています。

禅宗の僧侶は坐禅堂に入って、一人黙々と修行しているといったイメージを、持たれている方もなかにはいらっしゃいます。私事ですが、私が弟子入りするときに、母は、出家したら親に会うこともなく、修行し続けるのか、と聞いたぐらいです。修行や仏教者のイメージは非常に画一化され、なかなか在家者と共に歩むというイメージが結びにくいようです。瑩山禅師の言葉に触れていくといまの世の中に通じる部分があるし、いまの世の中が忘れてしまったような部分もあるのではないかと思います。

他者との交わりという意味で、「女流済度の菩薩」につい説明します。それは「二大誓願」の二番目に相当します。古代、鎌倉時代以前の話ですが、律令制時代に「僧尼令」が制定されましたが、「僧綱」や「大法師位（位の高い僧の意）」の恩恵を受けたのは男性僧侶のみでした。ただし、中国では尼僧に律師・法師の位を積極的に授与していましたが、日本ではほとんどありませんでした。女性天皇の時代に若干あったらしいのですが、それも単発的で長続きはしなかったというのが実情です。

鎌倉時代になり、旧仏教（真言宗・天台宗）は、女人成仏を説いて、多くの女性層から寄進を受けていた浄土宗（鎌倉新仏教）などを激しく非難しました。確かに、浄土宗では修行道場を提供していましたが、これを旧仏教側では激しく非難したといわれています。

ただし、旧仏教がまったく女流済度をしていないかというと、そうではありません。旧仏教側の慈円は『愚管抄』の中で、「女人此国ヲバ入眼ス」として、女性を日本国の根本と位置づけました。この文章に似たことを法然上人も書いていますし、瑩山禅師も『總持寺中興縁起』に同種の件りを述べられています。

旧仏教側の高弁は「華厳唯心義」（華厳経典の解釈）を、漢文でなくかな混じり文に直して、要するに書き下し文にして、冒頭に「数多の女房類親」のため、そしてより多くの人に読んでもらうために、このようにしたという注記を書いています。瑩山禅師も元亨三年（一三二三）に、道元禅師の『仏祖正伝菩薩戒教授文』を和文で書写しておられ、高弁と同様のことをされています。しかし、鎌倉時代に至っても、女性の変成男子往生（女性はそのままでは成仏できないので、一回男性になる必要がある）を力説する宗派は、やはり幾つかありました。

これらの状況を考えると、鎌倉時代は非常に女人救済をめぐり錯綜していたと思います。このような状況下で、二番目の発願「一願は今世の慈母、懐観大姉、最後の遺言に於て、領納の発願にして、是れ亦、女流済度の菩薩也。敢えて欺くべからず。遺命に任せて、之を護持すべし」を、瑩山禅師は説きました。

これに類似した瑩山禅師の行動は、『伝光録』四十一祖章や、また、『洞谷開山瑩山和尚之法語』では、「又女子なりとも、是の如き道を会せば、是れ長老なりと云うべし」というように、女性は僧侶としての名前を付さないという時代であったにも拘らず、瑩山禅師は変成男子往生を取り入れない考えを明言しています。そして、『洞谷山勤行条文』では、三人の尼僧の供養に関して、「寺の一大事である。後々の檀家と一緒に供養の式を行うべきだ」

とされています。
つまり、ここに旧仏教時代から存在していた僧侶間の階層や、出家・在家、男女の区別の存在しない、いわば何の制約もかけられていない、純粋な人間観に基づいた瑩山禅師の立場・思想を垣間見る思いがします。
そして、瑩山禅師が展開された仏教者と他者との距離感の接近は、仏教の日本伝来より鎌倉期に至るまで現れた祖師方の足跡を参考にしつつ、日本仏教、特に禅宗が陥りやすかった自己完結・自己満足を脱却した、禅師の独自性だったと思います。
さて、今の世にも通じるような人との交わりを説かれた瑩山禅師ですが、まだまだ解明されていない部分がたくさんあります。先ほど吉田先生からご指摘もありましたように、古代・中世期から、夢にはさまざまな意味を託されていました。夢を見るための修行「夢見」の儀礼・修行が行われていたぐらいです。密教系の経典では、夢の中で猿・犬・駱駝・驢馬に乗ったり、死人に触れた夢を見ると、それは修行がきちんとできていないことを意味しているとも説かれています。それぐらい修行と夢が関係する中で、瑩山禅師の場合は、『伝光録』各章・機縁では、夢のお告げで悟った部分を強調しています。それから『洞谷記』には『宝積経』を読んでいる間に瑩山禅師は眠ってしまい、夢の中で仏の示唆を受けています。また二大誓願の末尾にも、過去の祖師方よりお袈裟が伝わってきたという夢について書かれて、締めくくってあります。
このように、瑩山禅師も当時の仏教者と同様に夢を重視されていたと思います。
最後に、夢に関する重要なものですが、『伝光録』四十八祖・天童珏禅師章のように、「睡多くして寐語（みごし」とあり、「睡時」の語を使っています。「寐語」というのは寝言のことです。ここで瑩山禅師が説かれているのは、我見・我執もなければ、仏や祖師、天国と地獄、森羅万象へのこだわりもない、悟りへの執着もない状況を、

眠っている状況と同じだと説かれてもいます。

では修行もせずに寝ていればいいのか、ということではありません。瑩山禅師は『坐禅用心記』を書いて坐禅に心を用いるようにと用心を促しています。ここに眠ることに関して、瑩山禅師が悟りと同じと説いていることの矛盾点が残ります。ただ、眠りが眠りそのものを指しているのか、あるいは何かの譬えなのか、まだはっきりわかっていません。

瑩山禅師に関して、わからない部分、研究されなければならない部分が多々あります。それらが解明できて、瑩山禅師像がますます明らかになっていくことを祈っています。